

## 会堂長ヤイロの妻の物語

マルコによる福音書 5 : 21 - 24、35 - 43

2018/07/04 井田 泉

聖書の中には何度も名前の出てくる人物のほかに、名前の知れない人たちもたくさん登場します。名前は記されていないでもその人にスポットライトが当てられている人たちがいます。しかし今回取り上げるのは、名前はおろか、聖書の物語の中で一言も発しないひとりの女性です。それはカファルナウムの会堂長ヤイロの妻で、12歳の娘の命をイエスによって取り返してもらった母親です。



カファルナウム

カファルナウムはガリラヤ湖北岸の町です。漁業が盛んであるとともに、交通の要路にも当たるので通商で繁栄していました。税関が置かれ、その徴税人であったマタイはイエスの十二弟子のひとりになったと言われます。当時の人口は約5万人。ペテロの妻の実家はこの町にあり、そこがイエスの活動の拠点となっていました。またこの町には百人隊長指揮下のローマ軍が駐屯していました。

他の町と同様、このカファルナウムにも会堂（シナゴグ）がありました。土曜日の安息日には仕事を休み、皆で会堂に集まって礼拝をささげます。これが生活の中心でした。礼拝は、聖書の朗読とその説き明かし（解説）＝説教、祈りと歌です。聖書は昔から伝わるヘブライ語で朗読されましたが、アラム語で生活している人々はほとんど理解することはできません。そこで朗読された聖書をその場でアラム語に口頭で訳していく役割の人がおり、そしてその内容を教える人がいました。教えるのは通常は律法学者と呼ばれる聖書の専門家です。神の掟、つまりわたしたちは神を信じるものとして何を守り何を重んじて生きていくべきか、というのが中心でした。

会堂はその他、子どもたちに聖書を教える場でもあり、また紛争が生じたときの裁判所の役割も果たしていました

この会堂の管理をし、また礼拝に責任を負っているのが会堂長です。会堂長は聖書の朗読者や説教者を決め、礼拝が本来の精神や伝統にかなっているかに気を配ります。カファルナウムは人口が多く、会堂も大きかったので、会堂長は複数置かれていました。わたしの夫はその会堂長のひとりでした。



カファルナウムの会堂跡

会堂長は祭司や聖職者ではありませんが、大きな責任とそれなりの社会的地位を

持つ存在です。ましてその住まいは会堂に隣接していますから、その家族もある種特別な目で見られるところがあります。わたしたちの娘は、他の子どもたちとよく遊び、また勉強もして、同じように成長してきたように見えますが、しかし必要以上にちやほやされることがあるかと思うと、反対に「会堂長の子どものくせに」と非難の目で見られることもあったようです。そういうことが娘の成長に何らかの影響を与えなかったとは言えません。

娘が 12 歳のときのことです。男の子であれば律法を身に付けたとして成人として扱われ始める時期です。まだまだ子どもだと親は思うのですが、それでも結婚を意識される年齢に近づいていると思わないではありません。そのような時期に、娘は病気に、しかも非常に重い病気になって寝込んでしまったのです。いろんな医師に診てもらいましたが、その甲斐もなく、薬も効かず、娘は弱り衰えていくばかりです。気が気ではありません。毎日祈り、夫と祈りましたが、このままでは命があぶないと感じるところまで来ました。

わたしたちの頭に以前から思い浮かんでいたのはイエスのことです。あの方は何度かこの会堂で説教してくださり、夫とは知り合った中でした。あの方の説教は他の律法学者とはおおよそ違いました。他の律法学者が言わば上から教えを垂れる、教訓を与える、というものだとしたら、イエスはまったくそうではなく、その説教は聖書が鳴り響いてわたしたちの心の深みに浸透していく——そういうものでした。もっとはっきり言えば、イエスをとおして厳しくも限りなく優しい恵みの神さまの声が聞こえ、神さまとの命の交流を経験させられるのです。

夫ヤイロはイエスを敬愛していましたので、会堂長としての権限によって何度かイエスを説教者に依頼したのです。しかしこれには危険がありました。ほぼ全員の律法学者たちはイエスのことを快く思っていないでした。それどころか彼らは、何の社会的地位もないイエスを軽蔑しながら、その影響力をひどく恐れており、機会を見つけて捕らえて殺そうとして

いるといううわさもありました。事実、イエスが会堂で説教をされる時、律法学者やそれと繋がって強い力を持っているファリサイ派と呼ばれる人たちの目は、憎しみに燃えているとしか見えませんでした。

イエスは他で人の病をいやされたという話を聞いていましたから、娘のことをお願いしようかと何度思ったかしれません。しかし夫は律法学者やファリサイ派の反応が恐ろしかったのでしょう。なかなか決断してくれませんでした。

しかしもう限界に来ました。娘の息は弱くなり、心臓の鼓動も危うく、顔には死相が出ています。ついに夫はイエスを呼びに出かけました。わたしは娘の傍らで祈り続けながら、何とか間に合ってほしい、「イエスさま、来てください。早く来てください」と心に繰り返しました。

夫はなかなか戻ってきません。イエスさまが見つからないのか、それとも来てくださらないのか……。長い長い時間でした。その間にも娘は次第に弱っていきます。娘の名を何度呼んでも、もう反応はありません。そしてついに、娘は息を引き取りました。

わたしは人を頼んで、「娘は亡くなりました。もうイエスさまを煩わせることはありません」と伝えに行ってもらいました。娘の死を知った近所の人たちが集まって来ます。そして大きな声で泣き叫ぶ声が、だんだん多く大きくなってきました。これは通例のことなので、恨んだりすることではありません。けれども正直言えば、わたしはそっとしておいてほしいと切に思いました。

その時です。「なぜ、泣き叫ぶのか。子どもは死んだのではない。眠っているのだ」という声がしました。同時にそれをあざ笑う声がしました。夫がイエスを連れて帰って来たのです。わたしは迎えに出ました。イエスさまは、泣いたり騒いだりしている人たちを家の外に出しました。そしてわたしと、ヤイロと、連れて来られた3人の弟子だけを連れて、娘のいる所に入りました。先ほどとはまったく違う静けさと、祈りの空気が満ちました。

わたしはイエスさまがこの死んだ娘のために祈ってくださるのだと思いました。それだけでも感謝です。なぜもっと早く来てくださらなかったのか、という思いはありましたが、それまで呼ばなかったのは自分たちなのです。

イエスは手を伸ばして娘の手を握り、「**タリタ・クム**」と言われました。

タリタ　クーム

**Ταλιθα κουμ**

少女よ　起きなさい

すると娘は起き上がり、目を開きました。ベッドから下りて、歩き出しました。あまりのことにわたしたちは我を忘れました。

イエスは「このことをだれにも知らせないように」と厳しく言われました。なぜそう言われるのか、理解はできませんでしたが、これはそのとおりに大事に守らなければならないと感じたのです。

「食べ物を」とイエスが言われたので、わたしは我に返り、娘のために温かいものを用意しました。

イエスさまに直接お会いしたのはこれが最初で最後でした。

イエスが娘を生き返らせたということは、わたしたちは決して口にしませんでしたが、その話は自然に広がってしまいました。

わたしも夫ヤイロも、イエスを信じるようになりました。超能力者とか奇跡を行う人として信じた、というのとは違います。それはたしかに娘にしてくださったことなのですが、奇跡とか超能力といったことより、イエスさまがああとき娘の所に来てくださったこと。娘を本気で大切に思い、生かそうとしてくださったこと。事実生かしてくださったこと。その出来事に立ち会ったわたしたちは、イエスの愛と力を経験したのです。と同時に、ああときわたしたちは、イエスが繰り返し語っておられた「神の国」を経験したのです。それは、うまく言えませんが、人の権力とか能力とか、優劣を競うこととはまったく違う世界。恐れや心配、虚栄や葛藤から解放された、祈りと思いやりの世界です。神さまの愛に動かされて、自分も生き、人をも生かそうとする世界です。そのように思っています。

このことがあって後、およそ2年あまりして、イエスさまは捕らえられ、十字架の上に死なれました。こともあろうに、安息日の礼拝では、律法学者たちの多くがイエスをひどく非難しました。夫は会堂長の職から離れざるを得なくなりました。その後、わたしたち家族がどのように苦労したかは言葉にするつもりはありません。しかし苦労したことよりも、偉い先生たちから白い目で見られ、面と向かって「お前たちはイエスの弟子だろう」とののしられたとしても、わたしたちは何にも代えられない幸福を与えられたのです。

今もあの「タリタ・クム」がわたしの心にも、夫の心にも、そして不思議なことに今はもうすっかり大人になった娘の心にも響いており、その響きは、どんなことがあってもわたしたちを生かしてくれるのです。

もし、だれかが「あのイエスをだれだと思うか」と尋ねるとしたら、わたしはイエスさまの12弟子の中のひとりトマスが言ったと伝えられる同じ言葉を言いたいと思います。

「わたしの主、わたしの神」(ヨハネ 20:28) と。